

# 流るる光途

(大正七年桜星会歌)

一

流るる、光途重ね来て  
星霜此處に四十年  
北斗の光眸さす所  
櫻かざして先人の  
樹立し歴史を偲ぶ時  
誰か血汐の湧かざらむ

二

咽ぶ悲憤の誓より  
早や七年の春うつり  
人は変遷れど三百の  
健兒不滅の意氣を持す  
いでや謳はん北州の  
精力に満ちし凱歌を

三

陽春の光に覆翼まれ  
嫩草萌ゆる北の郷  
手稲の麓健兒等が  
燃ゆる想を合唱せば  
牧場の彼方際涯しらず  
高鳴たて、響きゆく

四

豊平川の夏の夜や  
玉兎の踊る波の上  
自治の流の悠久を  
語る川邊に佇めば  
ありし往昔を追憶へとや  
古塔に響く時の音

五

こ、石狩の大沃野  
静けき秋のめぐり来て  
天紺青の色ふかく  
地は豊穰なる平和境  
人は有情の美しき  
自然の愛に狎る、哉

六

萬里茫々雪の海  
白龍怒り風叫ぶ  
吹雪にさめし 暁や  
迷の雲をおしひらき  
常世の幸を恵むなる  
お、紅の朝日影

七

北辰冴ゆる夕まぐれ  
ボーイズビー  
アンビシアスの  
崇高き教を胸に秘め  
エルムの梢とことはの  
自由の調聴くところ  
若き生命を誇らばや